

『日本のガラス史』

(原著: Dorothy Blair, “A History of Glass in Japan”)

岩田糸子監修, 小川晋永編集, 上松敏明・吉田晃雄翻訳

(株)日本硝子製品工業会 (TEL 03-3595-2717), A4 変形版,
481 頁, 15,000 円 (税込)

日本電気硝子(株)

和田 正道

Masamichi Wada

Advisor, Research & Technology, Nippon Electric Glass Co., Ltd.

ドロシー・ブレイア女史の「日本のガラス史」が、(株)日本硝子製品工業会の 50 周年記念事業として邦訳出版された。1973 年に出版された本書は、本文 182 頁、図版 240 点、図版解説など 117 頁、また分析値 9 頁を含み、2000 年間の日本のガラス史を展望する書として前例がない。本文は、縄文・弥生時代 (5 頁)、古墳時代 (16 頁)、飛鳥・白鳳時代 (9 頁)、奈良時代 (18 頁)、平安時代 (17 頁)、鎌倉・室町・桃山時代 (17 頁)、江戸時代 (75 頁)、および近代 (23 頁) をへて、1974 年に京都で開かれる第 10 回国際ガラス会議への言及で結ばれている。

たとえば大仏開眼会が行われた 8 世紀中葉、大蔵省の典鑄司 (いものつかさ) に高句麗、百濟、新羅から来た製造者、および職人が配属され、ガラス製造は絶頂期に達したこと。平安時代にはガラスが身近な品であり、また 11 世紀の日本は中国へガラスを輸出していたこと。鎌倉、室町、および桃山時代にわたる 400 年

間は、事実上ガラス製造が消滅したこと。江戸時代には外国のガラスやガラス製造法が伝来し、長崎、江戸、大阪などで日本のガラスの復興が始まること。これらが豊富な図版と綿密な図版解説で述べられている。聖徳太子と奈良精神が語られ、源氏物語や空海がガラスと関連して登場する。佐久間象山がオランダの文献を参考にして硬質ガラスの製造に成功して喜ぶ手紙も収められている。著者の透徹した歴史的パースペクティブと、日本文化への驚くべき理解には深く感銘をうける。

四十数年前、ブレイアさんを福岡市の江戸ガラス蒐集家のもとへ案内したことがある。その時、「私の家系は長寿で 100 歳近くまで生きる人が多い。私はいま六十歳だが、あと 25 年の内に日本におけるガラスの歴史をまとめたと思っている」と言われた。著者 83 歳の年に本書が出版され、大いなる誓願は成就した。女史は 1989 年に逝去され享年 99 歳であった。

本書は交響曲のようである。時代が楽章のように連なり、日本のガラスの栄枯盛衰が主題 (モチーフ) を展開する。2000 年の日本の歴史における時代相がガラスを鏡として映し出さ

れる。ブレイアさんは、ガラスで名高いトレド美術館でアシスタント・キュレーターを25年間勤め、ミシガン大学の日本研究センターでの4年間を経て日本に8年間在住され、コーニング美術館の援助のもとに本書を完成された。その歴史観は示唆に富み、新世紀への展望をひら

く触媒になると思われる。1973年の原著出版時に著者は邦訳を拒まれたそうである。しかし25年が経過した現在なら、日本人の歴史観が本書を受け入れるまで変化したことに同意されるだろう。訳文は平明で格調高く、著者の人柄を伝えている。